

uide to 20th Century

nglish and American Literature

WILLA CATHER

Pioneers!

Antonia

Lost Lady

Professor's House

Death Comes for the Archbishop

Shadows on the Rock

The Kingdom of Art

The Sculptor's Funeral *Paul's Case*

Old Mrs Harris *Neighbour Rosicky*

20世紀英米文学案内 12

Willa Cather

キャザー

石井桃子 編

KENKYUSHA

20 世紀英米文学案内 12

キャザー

1967 年 7 月 20 日 初 版 発 行

1972 年 5 月 30 日 初版 2 刷発行

定価 600 円

編 者 石 井 桃 子

発 行 者 小 酒 井 貞 一 郎

印 刷 者 小 酒 井 益 三 郎

発 行 所 研究社出版株式会社

162 東京都新宿区神楽坂 1 の 2

電話 東京 (269)4521(代)

振替口座東京 83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

(落丁・乱丁本はお取りかえします)

1398-105012-1860

目 次

人 と 生 涯 / 石井桃子	1
----------------	---

作 品

『おお、開拓者よ!』 / 川越壬英子	54
--------------------	----

『私のアントニーア』 / 西川正身	77
-------------------	----

『迷える夫人』 / 厨川圭子	93
----------------	----

『教授の家』 / 安原幸子	109
---------------	-----

『大司教に死は来る』 / 川原 信	135
-------------------	-----

『岩の上の影』 / 川瀬スミ	155
短 編 / 佐藤宏子	175
「彫刻家の葬式」「ポールの場合」	
「ハリスおばあさん」	
評 論 / 西川正身	194
「家具をとり払った小説」「現実逃避」	
評 価 / 佐藤宏子	203
年表・書誌 / 石井桃子・佐藤宏子	巻末 1
索 引	巻末 20

人と生涯

はじめに

ウィラ・キャザー (Willa Sibert Cather) は、しあわせな作家であるように私には思われる。

彼女は、かなりの程度、自分の思うことをおし通してその生涯を送り、また死後も、その意志を主張している。彼女は、自分を、その作品によってだけ知られたいと望んで、遺書にもそのための周到な用意をした。

私の知り得た限りでは、その遺書には、彼女が生前に許可を与えた以外の私信は、引用してはならないことを規定し、また作品については、どんな形の劇化、映画化、またラジオやテレビジョンによる放送、また将来発明される、どんな種類の機械的メディアムを通しての再生化も禁止している。つまり彼女は、ウィラ・キャザーという一人の作家は、その著作だけに留めてこの世に残るべきだと考え、その主張は守られている。しかも、彼女の読者は、外国人も含めて年ごとにふえているらしいことを思えば、作家にとってこれ

以上のしあわせがあるだろうか。

しかし、そのことは、一方、彼女の生涯や個人的な感情を知ろうとする者には、大きな不便にもなっている。彼女が生前親しかった人の回想録や、親しかった人々からの聞き書きにたよるしかないからである。けれども、この点でも、彼女がしあわせであったと思えるのは、キャザーについてのよい回想録や、よい評伝の著者たちが、キャザーを愛し、よく理解した人たちであったことだろう。たとえば、『生きているウィラ・キャザー』(Willa Cather Living)を書いたイーディス・ルイス (Edith Lewis) は、キャザーが後半生を共に暮らした友人であるし、『ウィラ・キャザー——一つの回想録』(Willa Cather: A Memoir)の著者、エリザベス・シェップリー・サージェント (Elizabeth Shepley Sergeant) は、キャザーが『マクルアズ・マガジン』(McClure's Magazine)の編集者であった時代以来、彼女の仕事をみつめてきた人である。またキャザーの著作と作品についての最も洞察にとみ、ゆきとどいた評伝と思われる『ウィラ・キャザー——批評的伝記』(Willa Cather: A Critical Biography)を書いた

たブラウン (E. K. Brown) は、生前、彼女に面接はなかったが、文通のあった、息のあった批評家だった。

それともう一人、キャザーの生涯、ことに彼女がネブラスカ州レッド・クラウド (Red Cloud) ですごした少女時代について、かなりの手がかりを与えてくれる人に、『ウィラ・キャザーの世界』(The World of Willa Cather) を著わしたミルドレッド・R・ベネット夫人 (Mildred R. Bennett) がある。夫人は、生前のキャザーとは関係はないが、若いころ教師としてネブラスカにゆき、また現在レッド・クラウドに住むという偶然のことから、この土地の生んだ作家キャザーの研究にはいった。そして、同志といっしょに熱心にキャザーの作品の舞台となった場所の保存をはかり、またレッド・クラウドにウィラ・キャザー・パイオニア記念館および協会 (Willa Cather Pioneer Memorial) を建てて、彼女についての資料の蒐集にあたっている。

この生涯を書くために、私が主にたよったのは、いま挙げた著書であるが、かなり多く出てきたこまかい不審については、何度かベネット夫人の助けを借りた。たとえば、キャザーが移住していったころのレッ

ド・クラウドの人口とか、知人の名まえとか、できごとの時日などが、それぞれの著者によって、まちまちな点もあるので、こうしたことは、ベネット夫人の示唆により、妥当と思えるものを挙げておいた。

ヴァージニアに生まれる

ウィラ・キャザーは、一八七三年、二月七日、ヴァージニア州北部の町、ウィンチェスター (Winchester) の西北一〇マイルほどにあたるバック・クリーク・ヴァリー (Back Creek Valley) とぶらとに生まれた。(驚くことに、キャザーのようにあまり遠くない過去の作家の場合でも、その生年月日の正式の記録がなく、評伝者ブラウンは苦勞のすえ、これをつきとめたようであるが、そのことについては、彼の評伝にくわしい。キャザー自身は、一八七六年生まれを、最後までおし通していた。) バック・クリーク・ヴァリーは、シェナンドア山脈のふもとの美しい丘陵地帯に属し、彼女は、ここで満九歳までを過ごし、一八八三年、ネブラスカ州のウェブスター郡 (Webster County) に移

住した。

キャザーの作品なり、生涯なりにふれる人たちは、彼女が後年、あるインタヴューで語ったという、つぎのことばをよく引用する。

「八歳から一五歳までの年月は、作家にとつての形成期です。その時期に作家は無意識のうちに、最も主要な素材を集めてしまします。作家は成熟してから、多くの興味ある強烈な印象を得るということはあるでしょう。しかし、彼のテーマとなる素材は、一五歳までのうちに貯えられます」

ウィラ・キャザーの研究者たちは、この「八歳から一五歳」という時期が、彼女のネブラスカ州ウェブスター郡在住の時とほぼ重なりあうことを指摘して重視する。そして、ブラウンなどは、彼女のこのことばで、むしろ驚くのは、彼女がその前の幼児期を無視していること、ヴァージニアが殆んど彼女のテーマにならなかったことだといっている。

しかし、ヴァージニア時代は、はたして彼女の心に跡を残さなかったのだろうか。私には、ネブラスカの大平原や、それに挑む人々が、九歳のキャザーに強烈

な印象を残すためには、ヴァージニアで彼女が過ごしたような幼児期が、ぜひ必要だったと思えてならない。そしてまた、その後の彼女の物の考え方を決定する上にも、この幼児期は、かなり重要なものであったように思える。

ヴァージニアからネブラスカへ。これは、当時のアメリカとしては、殆んど最も古いところから、最も新しいところへの移住であった。この環境の違いは、外国人である私たちには、アメリカ人ほどに迫ってこないにちがいない。しかし、アメリカ史を見れば、すぐわかることだが、一六世紀の終わりに、もうヴァージニアにイギリスの植民が企てられていた。キャザー家の祖先がバック・クリーク・ヴァリー付近に住みついたのは、もちろん、それほど古くはなかった。しかし、ヴァージニアのノーザン・ネック（北部地帯）に生まれつくことは、やはりアメリカ独立以前から、イギリス的なにおい、ふるいしきたりがしみついた土地に生まれたということなのであった。

サー・ウォルター・ローリー（Sir Walter Raleigh）が北米移民を企てて、ここを未婚のエリザベス一世に

ちなんでヴァージニアと名づけたのは、一五八四年であつた。しかし、植民ははかばかしいかないまま、約一世紀がたち、一七世紀の半ばすぎ、イギリスはチャールズ二世という放漫な王さまを載っていた。ある時、彼はお氣にいらぬ貴族四人に、まだ見たことのない領土、ヴァージニアのある部分——その広さは、大まかにラパハノック川(Rappahannock River)とポトマック川(Potomac River)にはさまれたところというのであつた——を分けてやつた。この土地は、その後(一六七三年)、その貴族の一人が、ほかの三人の分を買いて一つにまとめ、彼の娘の嫁入り財産となつて、五代目フェアファックス卿の家のものとなり、やがて、六代目フェアファックス卿がこれを相続した。そして、この人は、偶然のことから、この広大な自分の土地を踏むことになるのである。

短氣なこの貴族は、婚約者に裏ざられたことから、再び祖国の土を踏まずと宣言して、アメリカに渡つてきた。しかし、現在のヴァージニア州の五分の一にあつたという彼の領地は、境界線もわからないほど広がつた(のちに、二〇歳前のジョージ・ワシントンが、この人

の測量師となつて働いている)。

もちろん、このぼう大な土地は、一人の地主の手にはあまり、年々、誤つて住みつくる者、他人の所有地と知つて住みこむ者たちに、争いのすえ分割されていった。一七六三年、ロムニー(Romney)とウインチェスターの中間のかなり大きな土地が、この貴族からキャプテン・スミス(Captain Jeremiah Smith)という人に、正式に譲渡された。そして、この人の孫娘のエミリー(Emily Anne Caroline Smith)の結婚した相手が、ウィリアム・キャザー(William A. Cathers)という若く豪氣な農場経営者であつた。

のちに、この夫婦は、キャプテン・スミスの土地を買いて、そこに三階建て、れんが造りの大きな家「ウィロー・シェイド」(Willow Shade)をたてて住むことになる。彼らが、ウィラ・キャザーの祖父母であり、彼女が幼時を過ごしたのが、この農場であつた。

キャザー家の祖先で、「旧世界」からアメリカに渡つてきた最初の人は、アイルランド出身のジャスパール(Jasper)だといわれ、この人は独立戦争にも参加して、アメリカが古い束縛から離脱するために戦つた。彼に

は、ジェイムズ (James) とかう息子があり、彼らは、親子ともに衆にひいて人たちで、牧羊農場を経営する傍ら、地方を代表して公共のためにも働いた。ジェイムズの息子のウィリアムも、彼らに劣らない人物であったことは、一八五一年に彼が買った一三〇エーカーの土地が、十余年のちには倍以上になっていたといわれることからわかる。そしてまた、敬虔なバプテスト派の信者であったこの人は、南北戦争がおこると、土地そのものが南部に属し、親きょうだい親類縁者、みな南部に忠誠をつくしたなかで、ただ一人北軍に加わったという、自主独立の精神の持ち主でもあった。やがてウィラ・キャザーの父となるはずの、ウィリアムの次男チャールズ (Charles Fectigue) は、南北戦争中には、まだ出征する年ではなかった。しかし、何度か戦線が移りかわる間に、「ウィロー・シェイド」は北軍がわにはいつてしまうこともあり、そうした場合、この邸は北軍将校の集合所にも提供されたというから、この一家は団結して、家長の主義にしたがったのであろう。

戦争がすむと、チャールズはボルティモアに出て、

法律を勉強し、学業が終わると、バック・クリーク・ヴァリーに帰って、父や兄のジョージ (George P.) との共同経営という形で、「ウィロー・シェイド」の農場を管理した。やがて、幼な友だちの美しい南部娘、ヴァージニア・ボーク (Virginia Boak) と結婚し、彼女の母で、未亡人であったボーク夫人 (Mrs Rachel Boak) の家に同居する。一年たつて、この若夫婦に長女が生まれ、チャールズは、「妹の名をとって、ウィリー (Willie) と名づけた」と、そのころすでにネブラスカに移住を決定していたジョージに書き送っている。

じつさい、一八六二年、アメリカで自作農場法 (Homestead Act) という法令が制定され、その翌年から自作農一戸について一六〇エーカーの官有地が入植者に解放されはじめて以来、中西部の大平原に続々と開拓者はいっていくというニューズは、ヴァージニアの山間地方にも早くから伝わってきたのである。進取の気性にとんだキャザー家の人々が、心を動かさないはずはなかった。この丘陵地帯では、土地がやせていたために、農業といっても、羊の放牧にしか適さず、牧羊業には大きな将来性がないことを彼らは

見ぬいていた。その上、キャザー家には、結核患者がつづいて出ていて、ウィリアム夫妻も、いく人かの子どもを失い、ウィリアム自身、この病気のけがあったため、この湿地帯からぬけだしたい気持ちは強かったようである。

ジョージのネブラスカ移住は、一八七三年のことであつた。ウィリアム夫妻はその翌年、長男夫婦をその農場に訪ね、一年間、彼らと暮らして、自分たちも移住の決心を固めた。彼らのるすの間、「ウィロー・シェイド」の管理はチャールズに任された。一歳未満のウィラ・キャザーが、父母といっしょにこの大きな家に移つてきて、ここを「わが家」として九歳まですごしたのは、こういう事情からであつた。

幼いウィラをとりまいた「ウィロー・シェイド」の生活は、質素ながら、ゆたかなものであつた。屋敷は、ある部屋の中を泉が流れているといった規模のもので、たくさんある部屋の一つ一つに暖炉がついていた。雇い人もたくさん居、また小間物や薬を売り歩く行商人たちを泊めるための部屋もあつた。主人の仕事は、山間のあちこちから羊を買い集め、それを農場で

放牧し、ふとらせてから、ボルティモアの市場に出すことだつた。羊の冬の飼料である干草をつくることも、このだいいじな作業の一つだつた。幼いウィラは、牧羊犬といっしょに父について歩き、戸外の生活を満喫した。また家の中では、女たちが毛や麻マをつむぎ、織り、季節がくると、ふとんづくり、敷物づくりの老婆たちが泊りこみでやつてきた。物心がつくにしたがい、好奇心旺盛な、きかん気の子どもになったウィラは、好んでこうした人たちの仕事部屋にはいりこみ、そのおしゃべりに耳をすました。こうした暮らしの中で、谷間の地形や季節の移り変り、さまざまな階層の人々の仕事ぶりが、あざやかにウィラ・キャザーの頭に刻みこまれただろうことは、彼女が晩年、このあたりを舞台にして書いた『サファイラとどれい娘』(Saffira and the Slave Girl)を読んでもわかるのである。「ウィロー・シェイド」の屋敷、またウィラ・キャザーらしい幼児の姿も、この作品の最後の部分に、ちらと登場する。

南北戦争後の疲弊したここの農村で、これほどの生活を維持できた者は、ウィリアム・キャザー以外に

はなく、彼は自分の土地内に小学校を建てて、戦争中の敵味方の区別なく、近隣の子どもたちを教育することとした。また、この学校を終えた子どもの中には、選ばれてボルティモアの学校に送られる者もあった。国会議員の娘として生まれたが、父が早世したため、母の生まれ故郷で育ったヴァージニア・ボーク(ウィラの母)もその一人だった。

これは、日本でいえば、農村のお庄屋的な暮らしといってもいいかもしれない。ウィラが後に、リンカンのネブラスカ州立大学時代に親しくなった、当時の学長の娘、ドロシー・キャンフィールド(Dorothy Canfield)——この人も後年、作家になったが——は、ウィラの幼児について「ウィラ・キャザーは、この国としては最も安定し、最も変わることに少なかった州に生まれ、物事の古いやり方を、他のどの階層よりも、またいかなる時にも頑固に守りぬこうとする階層に育ち、人格の形成に一ばんだいいじとされる時期をそこですごした」といういみのことをいっている。

ウィラの両親は、この家をひきうけたあと、南北戦争の影響がまだまだ尾をひいている時代とはいいいなが

ら、やはり若い人たちらしくダンスやパーティーも楽しみながら数年をすごした。ウィラのあとに、次々に三人の子どもが生まれ、大きくなっていった。しかし、彼らは学校にはいかなかった。同居していたボーク夫人、また時どき、ネブラスカから帰ってくるウィリアム・キャザー夫人、この二人の祖母から、聖書やバニヤン(John Bunyan)の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*)や、またホーソーン(Nathaniel Hawthorne)が子どものために書いて、『ピーター・パーリーの万国史』(*Peter Parley's Universal History*)として知られていた本などを、くり返し読んでもらった。またある時は、少し知能のたりない子守りのマージー(Margie Anderson)につれられて、山路を彼女の母親の家までゆくと、文字を知らない「poor white」の一人であるアンダソン夫人は、いくらでもお話をしてくれた。語り部のようなこうした人たちの語り口は、素朴で力に満ちていて、ウィラを魅了した。後年、彼女は、最初の物語作法の師は、あの貧しい山村の女だったといっている。

これが、彼女のうけた初等教育だった。

その間も、ネブラスカのウィリアムやジョージからは、チャールズに移住をすすめてきていた。チャールズは心を動かし、また、気性がはげしく、南部の紳士階級の気位をもつ妻のヴァージニアは、生活の基盤のある土地をはなれたがらなかった、というのが、二人の気もちだったようである。

そこへ、一八八三年のはじめ、「ウィロー・シェイド」の四階建ての畜舎が自然発火して焼けるという事件がおこった。ウィリアムには、この畜舎を再建してまで、「ウィロー・シェイド」の事業をつづけるつもりはなかった。こうして、チャールズ一家にも、中西部へ移住の機会はまわってきたのである。

彼らは、その年の四月、自分たちの物である家財を競売で売らたて、当時、バック・クリークにあった小さな駅から、未知の世界にむけて旅だった。同勢は、夫妻に、ウィラ、ロスコ（Roscoe）、ダグラス（Douglas）、ジェシカ（Jessica）の二男二女、それにボーク夫人と、ウィラがだいすきな、ちえのたりない女中のマージという大部隊だった。

今までなれ親しんできた人々や、見なれた山や草木

との別れは、九歳の少女にも、ほかの人たちにも心の痛むことだったろう。汽車が出ようとした時に、近所にやった牧羊犬のヴィックが、鎖を切つて駅まで追いかけてきた。その時のかなしみを、ウィラ・キャザーは、後年よく友人たちに語った。

ネブラスカ平原

この家族が目ざしたのは、ネブラスカ州でも南部のウェブスター郡、いわゆる「The Divide（分水界）」とよばれたリトル・ブルー川（Little Blue River）とリパブリカン川（Republican River）の間の広い台地にあるウィリアム・キャザーの家であつた。そのため、彼らは、原始時代とはあまり変わらない大平原に移住していったとはいえ、この木のない土地で家を建てるという苦労からは始めないですんだ。

しかし、彼らより一〇年前にやってきたジョージ夫妻の場合はどうだったろう。そのありさまがよくわかるので、ベネット夫人の『ウィラ・キャザーの世界』から、少し長くなるけれど、引用させてもらおう。

ジョージ・キャザーは、一八七三年の六月、ボストン生まれで、マウント・ホリヨーク・フイメール・セミナリー出身の若い婦人、フランセス・A・スミス (Frances A. Smith) と結婚した。二人とも教師であった。ニュー・イングランドで新婚旅行をすませた後、彼らは鉄道でネブラスカ指して出発し、自分たちの農場 (Homestead) から一番近いジュニアタ (Juniata) 駅で下車した。ジョージは大馬車を雇い、後方の車輪の一方の円周をはかり、その輪にきれを結びつけて回転数を数えやすいようにし、さて、彼らは大平原にのりだした。方角をまちがえないよう、彼らはコンパスを持ち、若い妻は後ろの席で車輪の回転数を数えて距離をわりだした。「ゆれる車輪」 ("Jolt of the Wheel") ということばは、後にウィラ・キャザーの詩「メコン平原」 ("Macon Prairie") に出てくる。こうした計算で自分たちの農場と思われるところにつくと、その土地からはずれないよう、念のため、中央と思われる場所まで進んで、テントを張り、夜の用意をした。

ジョージ・キャザー夫人——ウィラが呼んだ名を使えば、フランク伯母さんだが——は荷物の中から白いシャツ、白い毛布をとりだして、寝床をつくった。が、その夜半、野火に見まわれた。その年の秋は異常に乾燥していて、炎は奔馬の勢いで迎りをなめていった。土地の事情に通じた馬車の御者は、迎え火をつけ、夫妻を助けて荷物をすでに黒く焼けてしまった場所に移し、またおちつかせた。

朝、フランク伯母は、まっ黒くなった寝具を発見して、がっかりした。そして、水はどこから汲んでくるのかと聞くと、二マイル先のカウリー農場よりも近くにはないことがわかった。ジョージは桶をもってそこまで出かけたが、カウリー家でもまた、運よく見つけられる場所——時によると、それは一六マイル先のレッド・クラウドであることもあった——から運んでくるのだと聞かされた。

このように水は極度に乏しかったから、ジョージ夫妻は、水は料理と飲料にだけ使った。時によると、水は腐って、ぬるぬるしてきて、飲むに耐えなくなり、夫妻の舌や唇ははれたり、ひびわたりした。それでも彼らは、一滴の水もむだにしなかった。そのうちジョージは櫛を見つけて、それにすべり板をつけて、平原をひっぱって歩いた。その櫛は前に灯油を入れたものだったが、渴いていた彼らはその奇妙なおいを無視した。

ジョージ夫妻は、このような困難にもめげず、まもなく、この近辺に移住していた人々の間の中心人物となり、彼らの住む管区は、キャザートン (Catherton) と呼ばれるようになった。彼らの建てた三〇部屋もある木造家は、ウィラ・キャザーの後の作品『われらの仲間』 ("One of Ours") の舞台になって出てくる。つまり、この夫婦がホイラー (Wheeler) 夫妻の原型

であり、その息子、G・P・キャザーから、この作の主人公クロード (Claude) は生まれたのである。またこの辺境の地で、自分の育った環境とはまったく違った辛酸^{しんさん}をなめるジョージ夫人は、「ワグナーのマチネー」(A Wagner Matinee)の伯母としても生かされている。

チャールズ一家のはいつたウィリアムの家は、ジョージの家からは三マイルほどはなれ、やはり大きな木造家屋であった。ウィラたちは、当時新しく延長されたバリーントン・ミズーリ鉄道のレッド・クラウド駅で、せま苦しい汽車の席から解放され、長い夜道を馬車にゆられて、この家に着く。その様子、またあたりの風景は、『私のアントニー』(My Antonia)の冒頭で、殆んど自伝的といつていいまでに鮮やかに再現されている。

その翌日から、この「赤い髪を短く切った、きかなそんな青い目をした」九歳の少女の前には、いままでとはまったく違った生活がはじまった。もう家の外には、「しめった牧場」も、「青い壁のようにそびえる峰」もなく、どちらを向いても、レッド・グラスが

ぶどう酒色の波になってなびく平原が、ゆるやかに起伏しながら目のとどくかぎりつづいているだけであった。ほかに人が住んでいないのではなかったが、木といえ、あちこちのクリークのふちに生えるかん木だけだったから、たいていの開拓者たちは家を作るのに、一ばん手近にある、しかもあり余るほどある材料、草土を使った。土を四角く切り、それをつみ重ねたソッド・ハウス (sod house) に住む者もあり、土手を横穴式にくりぬき、丸太や板で支えたダッグアウト (dugout) で、この大平原の原住民ゴウファア (地ねずみ) のように土の下に住む者もいた。そして、こうした開拓民の中には、異様な服装をし、異様なことばを話す人たちが大ぜいいた。ヴァージニア出身者がまばらに入植していたキャザートンのまわりには、外国からの移民、つまりドイツ人、ポーミア人、スウェーデン人、ロシア人、スイス人などが住みついていたからである。数からいうと、ヴァージニア出身者は、外国移民に比べて半数以下のものであったが——そしてまた、移民に対しては十分親切にしてやりながらも——自分たちを彼らより一段と高いところにおいていた。

こうしたところへ突然つれてこられたという環境の変化は、ウィラにとっては一方では大きな衝撃であり、また一方では、しきたりに縛られた生活からの解放というように働いたようである。祖父は子どもたちに小馬を一頭買っておいてくれた。彼女は、おとなたちがまだ形にならない農場管理に追われている間に、この馬に乗り平原を駆けまわりはじめた。『私のアントニア』のジム(Jim)がしたように、一週間に二度、一二マイルの道を郵便をうけとりにゆき——ウィリアムは、キャザートンの郵便のせわもしていた——それ

開拓民の間に配る役目もひきうけた。移民たちは祖国からの便りを何よりも待ちうけていたから、彼らは家族総出でウィラを歓迎した。こうして、土の壁の中から蛇の頭がのぞく光景や、暗いダッグアウトの中の衣装箱から出てくる外国製の美しいショールなどが、彼女の頭に強く焼きつくことになる。

ウィラには、すぐ親しい遊び友だちもでき、ドイツ人の隣人ランブレヒト家(the Lambrechts)の子どもたちとは平原を遠出して、ブレアリー・ドッグ(prairie-dog)とよばれるマーモット属のけものもの群生するプ

- 1 ウィラ・キャザー・パイオニア記念館
- 2 『迷える夫人』の背景地
- 3 『私のアントニア』のピクニックの場面で、ジムたちがここで夕日の中に鋤を見た
- 4 レッド・クラウド駅
- 5 マイナー家の農場のあと
- 6 小さい砂州のあと(『魅いられた絶壁』『ルーシー・ゲイハート』などの背景地)
- 7 ヴァージニア出身者たちの建てたニュー・ヴァージニア教会のあと
- 8 ウィラ・キャザーの見に行った prairie-dog town のあった場所
- 9 ウィリアム・キャザーの農場
- 10 ジョージ・キャザーの農場(『われらの仲間』の背景地)
- 11 G.P.キャザー(『われらの仲間』のクロード)の墓
- 12 『私のアントニア』と「ロジキー爺さん」のモデル、アンナ・パヴェルカとその夫の墓
- 13 アンナが子供たちを育てた家
- 14 「ロジキー爺さん」にあらわれる息子ルードルフの家
- 15 ジョージ・キャザー夫人が教えた、1874年にできた小学校
- 16 『迷える夫人』のフォレストア邸をめぐるクリーク